
テレビ草創期の番組から見た日本らしさの象徴と 文化の表現に関する研究

Symbols of “Japanese-ness” and the Expression of Japanese Culture Seen in the Programs of the Early Years of TV Broadcasting in Japan

飯塚恵理人 協田泰子

はじめに

1953年（昭和28年）2月1日、日本放送協会がテレビ本放送をスタートさせた¹⁾。半年後の8月28日には日本テレビ放送網が初の民間テレビ放送局として同様に第一歩を踏み出した。これが、サンフランシスコ講和条約の発効により主権を回復した日本が平和国家として国際社会への復帰の模索を始めた翌年に当たるのは、単なる歴史の偶然であろうか。

テレビ本放送開始の翌1954年、東京都は60年夏季オリンピックの開催都市に名乗りを上げた²⁾。翌55年のIOC（以下、国際オリンピック委員会という）総会で同じ第二次世界大戦敗戦国イタリアの首都ローマに敗れて終わったのは周知の事実である。

時あたかも2020年東京オリンピック・パラリンピックを前に、2019年NHK大河ドラマ（第58作）「いだてん～東京オリムピック噺～」を通して、世に広く知られようとしているのは、この時の東

京の招致活動があくまで次の1964年オリンピックを見据えた準備の一環で、さらに、そのように前倒して早目の立候補を勧めたのが時のブランデーIOC会長自身であり³⁾、またその助言に希望を見出しつつ、朝日新聞記者で日本水泳連盟会長を務めた田畑政治（1898-1984）らを中心に五輪招致活動が進められていったという事実である。阿部サダヲ演じる田畑は当該大河ドラマ後半の主人公として描かれている⁴⁾。これらの動きは、10年後の1964年、アジア初のオリンピック開催という、特に日本のスポーツ関係者にとっては戦前からの悲願達成として結実することとなる。

このように、1953年に始まるテレビ草創期は、戦後復興とその集大成とも言うべき東京オリンピックに向けた招致活動の時期とピタリと重なる。一度は軍事大国に転じた近代日本が、敗戦により180度価値観の異なる民主主義国家として国際社会で再スタートを切った。このことが、海外ではどこまでどのように受け止められ、評価されるのか。あるいは、その平和国家としてさらに必要だと判断されるものは何か。また、その際に日本が独自のプラスの財産として対外的に強くア

ピールできるものとはいったい何なのか⁵⁾。テレビ草創期とは、オリンピック招致を機に日本がこのような事柄についてまさに実践的に考えていく必要が生じ、また、そのような余裕が日本自身にもやっと少しずつでき始めた頃に合致する。テレビはあらゆるジャンルの番組を音声のみならず、映像ともどもお茶の間で楽しむことができる画期的なメディアとして戦後の日本社会に登場した。それは、スポーツを含めた日本固有の文化や自然美の魅力の再発見と、その表現のあり方において、特に映像を武器として意識していくことが可能な時代を迎えたことを意味する。

本研究では、テレビ放送が1964年東京オリンピック開催決定以前から、日本ならではの情緒や文化・自然を活かす形で、ドラマや教養番組においてどのような映像表現や場面設定が行われ、音声やセリフとともに何を伝えようとしたのか、特に、東京オリンピックに向け、スポーツはもちろん、たとえばオリンピック文化プログラムの一環である芸術展示に関連する番組であっても、日本らしさを映像的にどのように意識して表現しているかについて考察したい⁶⁾。筆者らはこれまでテレビドラマにおける演出方法の特長等について研究を行った他⁷⁾、特にテレビ草創期のドラマに関しても研究を進めてきた⁸⁾。さらに、2018年第1回(3～5月)NHK番組アーカイブス学術利用トライアル⁹⁾の採択を経て¹⁰⁾、テレビ草創期からの番組としては「第1回NHK民謡舞踊まつり」(1956年)、昭和38年度芸術祭参加ドラマ「天からもらった場所で」(1963年)、大型時代劇「源義経」第1回 鞍馬の火祭り(1966年)、「聖炎旗のもとに(第9回国体)」(1954年)の4本を視聴する機会を得て、その構成表から各番組の静止画計20枚分のデータを入手した。以下、これらの視聴番組と静止画データをもとに、関連する参考資料ともども草創期からのテレビ番組の特徴や日本らしさの表現方法について具体的な考察を行う。

1. 「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」

1956年8月19日放送「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」は、東京・日比谷公園で開催されたものである。



画像1 「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」より

舞台上の動きを捉える以外に、解説者で民謡研究者の町田嘉章と聞き手のアナウンサーの二人が観客席に座り、町田の解説を聞くという演出のシーンをもう一台のカメラが映し出しながら、番組が進行する。カメラが舞台上を映す間、町田は登場しないが、その間も音声による解説を行っている。たとえば、岐阜県白川郷の民謡の演目では、男は黒系統の着物に袴、女は緋の着物にもんぺのような作業ズボンで山村の雰囲気を出している。この系統の踊りが白川郷以外では五箇山などにも分布していることを、町田が音声のみで補足説明する。確かに画像1の映像でこのように全員の笠に「白川郷」の文字を入れて持たせることによってこの舞踊が踊られる地域を明示する工夫がなされている。費用の比較的安価な小道具を用いつつ、この民謡を知らない人でも見てすぐに「わかる」映像とともに、それに合わせた解説を心がけている点で、この民謡番組は「観る民謡」「視覚でわかるラジオ」を志向していることがわかる。



画像2 「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」より

数台のカメラを同時に回して映像を切り替える映画とは異なる手法で舞台ではなく日比谷公園からの中継放送であるが会場の臨場感を出している。「解説町田嘉章」とクレジットを入れることによって視覚的にも誰が解説しているのかわかるように工夫しているが、左側の町田の服装が半袖で背景の会場の人々が着ている夏服と違和感ないのに対して、アナウンサーは白いワイシャツに蝶ネクタイで背広姿の正装であり、「観客に見せる」ことを意図した「舞台衣装」であると言える。宮田輝以降、民謡番組の司会者が「タレント化」してゆくが、その萌芽がもっとも早いこの段階の民謡番組で「見て楽しむ民謡」への志向の中からテレビカメラの切り換えという劇場演劇にはない工夫から生まれつつある。

「六斎踊 京都吉祥院菅原組」着物をかずいで顔を隠している変化のものが白い糸を獅子に投げかける場面。囃子だけでなく民俗芸能・民謡でも動きのある特徴的な場面を持つ演目を選んで放送していることが伺われ、「絵のあるラジオ」を志向していると言える。この背景には提灯に「吉祥院菅原組」と書かれており、これも提灯という舞台の小道具で、出演者を観客とテレビの視聴者にわからせるという、観るための工夫である。この番組は基本的に保存会や祭礼の社中など「素人」の出演だが、画像4の「おてもやん」は「唄 井上常八 三味線 坂口ハツ子 川上フネ」と出演者がキャプションで入り、三人共袴をつけているので普段着ではない「舞台姿」である。この時代テレビの民謡番組からプロとしての民謡歌手が生まれつつあった証拠画像であると言えよう。テレビに出ることによって民謡の歌詞も、不特定多数の人が楽しむテレビメディアとしてはふさわしくないとの判断により、オリジナルの表現が改められるケースも生じた。見て、聞かれることへの意識を高める意味ではまた、「舞台衣装」も「日本らしさ」「その土地らしさ」の表現が工夫され、1964年東京オリンピックの芸術展示の一ジャンルに民俗芸能が選ばれたことから、その延長線上で民謡番組が放送されることにも繋がってゆく。



画像3 「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」より



画像4 「第一回NHK全国民謡舞踊まつり」より

2. 「天からもらった場所で」

本作品は、岩間芳樹作、NHK名古屋放送局制作による東京オリンピック前年の昭和38年芸術祭参加ドラマ（1963年10月18日午後8：00～8：59総合）で、中小企業に集団就職した少年少女たちが、希望と現実の間でたくましく生きる姿をつづっている。



画像5 「天からもらった場所で」より

九州から名古屋に集団就職した三人が、公休日に働くように強要されて拒否して二階の自室にいる場面（画像5）では、その前の場面で社長と暴力団に脅され、暴力団員がオートバイで出ていったところ。ラフな半袖シャツ姿が当時の工員の作業以外の時間を象徴している。社長への憤りと自分たちを「どん百姓」と呼んだヤクザへの反感は強いが、三人共の表情に将来への不安と仕返しへの恐れが感じられる。窓の外の書き割りに木造の工場の壁が書かれており、下町の下請け工場の雰囲気象徴的に伝えている。



画像6 「天からもらった場所で」より

画像6は前出の集団就職を受け入れた下請け工場主。自身で機械も扱う作業員でブルジョワではないがひげも剃り髪もさっぱりしている。仕事の中に一人が疲れて倒れて病院に運ばれたことを受けて職員から公休日を守り残業を減らすように要求されて怒りの表情を浮かべている。



画像7 「天からもらった場所で」より

画像7は前記の下請け工場の事務員の恋人で、取引先の元工場で本工になれた工員。このカットの直前に恋人と新しい公団住宅を見下ろす丘に二人で座っているカットがある。町に出て数年が経っておりこの事務員と結婚してこの団地に暮らすことを夢見ている設定。ひげもきれいに剃り、白いワイシャツとネクタイが集団就職組の中で成功した人物であることを象徴的に表現している。



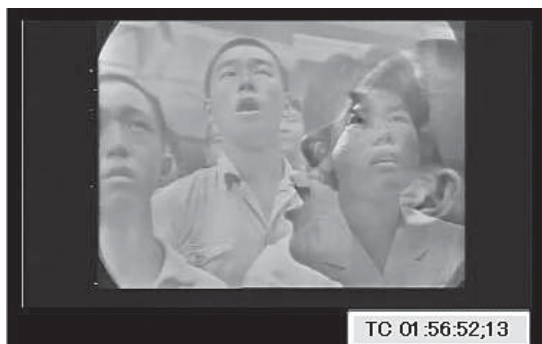
画像8 「天からもらった場所で」より

集団就職した生徒たちの中のリーダー、土地にしがみついて貧乏ながら働き続けている父を持ち、自分の人生を自分で拓こうとした理想が下請け工場での与えられた環境によって挫折しつつある悩みを述べる場面。黒縁メガネで考える悩み多き青年であることを表現している。



画像9 「天からもらった場所で」より

下請け工場の主人が本工場の職員に威張られていることを二階で聞いて自分たちの立場を主張しつつ楽しく働きたいという決意を述べるシーンに続いての、リーダーの寡黙な父親が祭りの時だけ狂乱的に踊ったと回想する場面。祭りのもみ合う群集を移すことでこの自分たちの問題と課題が世代を越え、多くの人々の課題でもあることを表現している。

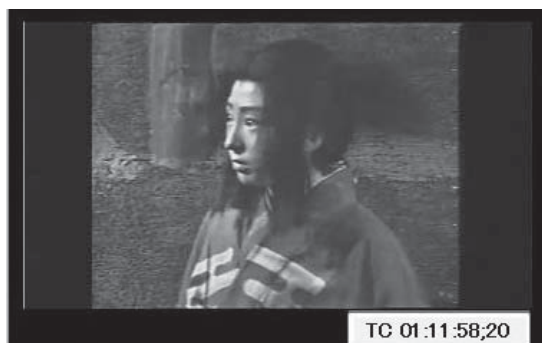


画像10 「天からもらった場所で」より

仕事に疲れた時に多くの工員が歌っている様子を表現している。そして工場長に団交しつつ、この場所で働くことを皆で誓うことを合唱の場面で象徴しつつ本作を終える。

3. 「源義経」

「源義経」は尾上菊之助（四代目・七代目菊五郎）¹¹⁾主演による1966年の「大型時代劇」¹²⁾で「鞍馬の火祭り」は01月02日(日)午後08:15～午後08:59放送の第1回。演出を手掛けるドキュメンタリー出身の吉田直哉は、前年の「太閤記」に続いてこれが2作目となった。



画像11 「源義経」より

兄から、牛若丸のいるところに案内して欲しい

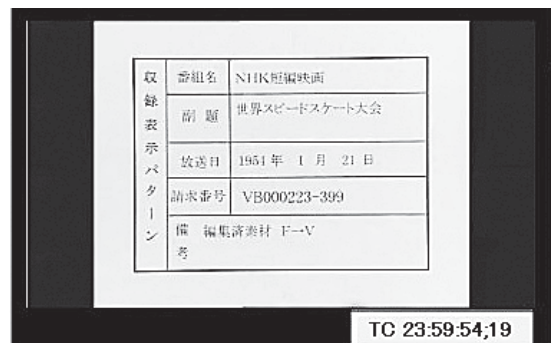
と言われ困惑するあかね。髪がおかっぱで、模様がシンプルであることから庶民の少女である設定となる。兄弟は牛若丸の父源義朝の忠臣で義朝とともに討たれた鎌田正清の遺児で、あかねは鞍馬寺の坊官に預けられているという設定。兄は平家方に寝返ろうとしており、あかねはそれを察している。渡辺美佐子は放送当時すでに三十代だが化粧していないようにみえるメイクで少女役を演じている画像である。燃えた松明が数多く行進するように見える画像、音声の掛け声とともに合わせて火祭りの行列が鞍馬山を登ってゆく様子を象徴的に表現している。虚構の世界をリアルに見せることを志向するテレビドラマが象徴劇と同様の「それらしく見せること」を意図した手法を用いることは興味深い。牛若丸がだまし討に來た者を撃退し、平家の手の者が母に頼まれて來たと常盤御前の名前を出したことについて怒る場面。牛若丸は現在の七代目尾上菊五郎で放送当時二十四歳だが、烏帽子をつけていないので元服前の少年という設定となる。憂いがある怒りを含んだ表情が牛若丸らしく凛々しくて素晴らしい。

以上、第一回NHK全国民謡舞踊まつりの東京・日比谷野外音楽堂からの野外中継と、『天からもらった場所で』、『源義経第一話 蔵馬の火祭り』の三作品とその静止画について分析した。日比谷の中継では、その元となった祭礼における芸能と、野外音楽堂でのステージとの両方を茶の間の視聴者に本物らしくリアルに感じてもらうため、衣装や提灯などに保存会の名前を入れたり、分かりやすく演出したりしている。一方、ショーである野外民謡祭りの会場の雰囲気を見聴者に伝えるため、出演する専門家が名前入りで解説したり、観客席にいる蝶ネクタイ姿の司会者を映したりする。『天からもらった場所で』は、集団就職と労働争議という、当時の社会問題を扱った作品であることから、様々な階層・立場を含む視聴者の利害を刺激しないように配慮しつつ、ワイシャツを

成功した工員の象徴に用いたり、黒縁メガネを悩み多き青年の象徴に使ったりするなど、視聴者の共感を得やすい身近な小道具を用いて演出している点に特徴がある。

4. 「聖炎旗のもとに(第9回国体)」

このタイトルのDVD¹³⁾に収められた番組はなぜその1本だけではなく、①1954年1月21日放送「世界スピードスケート大会」(17分30秒)、②1954年5月30日放送「第21回世界卓球選手権大会(ロンドン)」(17分30秒)、③「1954年世界レスリング選手権大会」(19分)、そしてメインタイトルの④「聖炎旗のもとに(第9回国体)」(30分30秒)の4本であった。さらに④については「音ネガが存在する¹⁴⁾が、音ずれが激しいため音入れせず」とのコメントがあり、モノクロのフィルム映像のみで音は入っていなかった¹⁵⁾。



画像12 各番組の冒頭に示される
放送および保存関連情報

これら4本の登録番組名はいずれも「NHK短編映画」で、副題にそれぞれ先述のタイトルが付されている。テレビ番組なのになぜ「映画」なのか。ここにテレビ草創期の時代性が表れている。というのも、テレビ放送開始当初、放送局自体の番組制作能力が未熟だったため、映画会社等、放送局以外の外部製作によるフィルム作品が「映画」と

してテレビ放送されていたケースが多かったからだ。「映画」で最もよく知られるのはニュース映画だが、それ以外にも短編映画など4種類あった¹⁶⁾。NHKは本放送開始とともに、日映新社制作による「日本ニュース」を週1回、15分のテレビ用に編集し、映像ニュースとして放送していたが、半年後の53年8月からはこれをNHKの自主取材に切り替えた¹⁷⁾。こうして始まった「NHK映画ニュース」はタイトルの頭にNHKと銘打つことにより、映画会社等とは異なる自前の製作であることを明示したのである。一方で、スタジオから文字や地図、パターンとともに伝えられたのが「NHKニュース」¹⁸⁾であることを考え合わせても、ここで言う“映画”とはフィルム映像を指すことが分かる。

「NHK短編映画」は54年度からNHKが16ミリカメラ¹⁹⁾とフィルムの特性をいかして自主製作した番組のことで、『聖炎旗のもとに』の一連の4編もNHK短編映画スタート年度の作品である。この草創期には記録“映画”として好評を博した作品が多い²⁰⁾。この時代が3年ほど続くうちに「映画」とは名乗らず番組独自のタイトルを冠したフィルム番組が現れた。57年11月に放送の始まったテレビドキュメンタリーの草分け的存在、「日本の素顔」(30分)である。ラジオ番組の録音構成の手法をテレビに取り入れ、仮説を立て、それを現実に検証していく過程を見せることで課題を提起し²¹⁾、1964年まで続くフィルムシリーズとなった(計306回)。「映画」卒業は、放送局がこの頃から次第に映画を意識せず、スタジオを含め、テレビ自体の撮影技術や表現手法を確立させ、精神的に立ち立ちするようになっていった証左でもある。

さらに、前項(「源義経」)との関連で付け加えると、「日本の素顔」のタイトルの名付け親で担当ディレクターの一人が、1963年に芸能局第一芸芸部に転じ、その後、大型時代劇「太閤記」、さらに「源義経」の演出を手掛けた吉田直哉(1931-2008)である²²⁾。ちなみに吉田は、東京オリンピックの前年、大会を控えて急激に変貌する大都市の

表情を描く特集「TOKYO」を手掛けた。両親を捜し求めて歩く女性の姿と一人称のモノローグを通して「東京」を映し出す心象ドキュメンタリーだが、タイトルがアルファベットのTOKYOなのは、オリンピック開催都市・東京を海外に紹介する目的で制作されたため、英語版のフィルムもNHKに保存されている²³⁾。母親が見つかり、女性と同居するが、やがて母は娘の預金通帳を持って姿を消す²⁴⁾。吉田は本番組放送後にドラマ制作に異動した。

さて、戦後の荒廃と混乱の中、スポーツを通して国民、とりわけ青少年に勇気と希望を与えようと1946年、戦災を免れた京都を中心とする京阪神地域で開催されたのが、国民体育大会(以下、国体という)第1回大会である。以後、国体は毎年、各都道府県持ち回り方式で開催されている。番組の放送された1954年の第9回大会の開催地はテロップには一度も案内がなく、もともと音声も入っていないため不明なのだが、過去の大会記録によると、秋季大会が寒冷地の北海道で行われたが、地域性を考慮して、夏季大会に先立ち8月下旬(22~26日)に開催され、残暑が厳しい中で力いっぱい競技を繰り広げた²⁵⁾。確かに昭和天皇・皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、日差しのもとで展開される競技風景の映像が多いようだが、音声がないため、推測の域を出ない。また、国鉄(当時)による北海道への輸送事情に鑑み、参加人数を12,000名に制限し、実施状況は27競技、12,607名であった。なお、オリンピックの聖火に当たるシンボルを、国体では松明、あるいはかがり火を意味する「炬火」とい²⁶⁾、これをモチーフとした国体旗を「聖炎旗」



国体旗、または「聖炎旗」

と呼ぶ。これが番組名の由来である。

以下、各番組の考察に入るが、①は、1954年1月21日から札幌・円山公園競技場を会場に日本で初開催された世界スピードスケート大会（男子オールラウンドスピードスケート選手権大会）のハイライト番組である。男子スピードスケート界は当時、北欧勢の天下であった。この大会にも出場したノルウェー代表のヤルマル・アンデルセン（Andersen, Hjalmar Johan 1923-2013）は、1950～52年世界選手権で総合3連覇を果たし、1952年に地元オスロで開催された冬季オリンピックのスピードスケート男子でも3種目（1500m、5000m、1万m）を金メダルで制した。しかも5000mでは2位に五輪史上最大の11秒差、1万mでも25秒差をつけ、世界新記録でゴールしたという圧勝ぶりであった²⁷⁾。しかし、さすがのヒーローにも陰りが見え始め、それを切り崩すかのように新しくソ連（当時）勢が台頭する時代に差し掛かっていた。



画像13 札幌・円山公園競技場

初めて見る世界選手権大会に集結した大観衆のお目当てはもちろん、その名の知れ渡ったアンデルセンで、その時の状況について実況アナ²⁸⁾は「木に留まっているのはカラスではございません、全部、人間です。」と表したうえで、「ざっと5万であります。誠に盛んな世界選手権大会でございます。」と伝えている。現在のように文を体言止めにすることもなく、終始極めて丁寧な日本語での実



画像14 世界スピードスケート大会総合表彰式

況であった。「銀盤の覇者」と紹介された長身のアンデルセンは、しかしながら「長旅の疲れで不振」とされる通り、総合6位に沈み、代わって優勝したのはソ連のシルコフだった。以下、2位ゴンチャレンコ、3位グリシン等、黒いウェアが忍者のようなソ連勢の活躍が目立った（画像14）。日本勢では総合9位に浅坂武次選手（1930-）が入ったが、世界レベルには遥かに及ばなかった²⁹⁾。

これらのレース結果を伝えるテロップは当時、もちろん手書きなのだが、実況が「ソヴィエト」と連呼する中、画面上の文字では「ソ連」と表記されたり、次は「ソヴィエト」になったりして、国名がまったく統一されておらず、今ならば、到底あり得ない状況である。また、会場が屋外であるため、レースと次のレースとの間はもちろん、レース中であっても雪が降りしきる悪コンディ



画像15 コースと観客の間隔も非常に狭い

ションになると、「選手が走り去った後、たちまち整備員が道路？（ロード？聞き取り不可）に出まして、降り積もった雪をどけるのに余念がございません。」

国名表記が不統一なのに加え、地名もまた、やや正確さに欠けるものが見受けられる。②は登録の番組副題に（ロンドン）と記載があるが、実際にはロンドン郊外のウェンブリーで行われた卓球の世界選手権のダイジェスト映像（編集済み）である。オープニングテロップに「NHKテレビジョン映画—提供BBC—」とある通り、終始BBCが作った国際映像らしき内容で、日本人選手のアップは一つもなく、音声も英語のみである。時々女子の試合も映るが、男子団体決勝で日本が地元イギリスを5-2で破り、次いで対チェコ戦を5-4で制して初優勝を飾った部分を主とする。日本代表は本大会から団体5連覇、女子も1957年から団体4連覇を果たす黄金の時代を迎えていた。中でも破竹の勢いを示すのは、本大会男子シングルスで初優勝を果たし、2年後の東京開催の世界卓球選手権まで男子シングルスとダブルス、混合ダブルス、団体で計12タイトルを手にした荻村伊知朗選手（1932-1994）だ。氏は、後に国際卓球連盟会長として1991年、千葉開催の第41回世界卓球選手権に統一コリアチームとその来日の実現³⁰に尽力したことで知られる。その荻村選手の勇姿も映ってはいるが、肝心の音声は英語だけで、しかもレベルが低いためきわめて聞き取りにくく、また、映像も遠めのロングばかりで全体も暗いことから、試合内容が非常にわかりにくかった。最後に日本語のテロップで結果スコアだけが示されていた。

それに比べると、③は東京開催で関係者肝煎りの大会だったのであることが来場者の顔ぶれなど随所から読み取れる。この大会は、正式名称を1954年世界レスリング・フリースタイル選手権大会といい、腰から下の攻防を禁止するグレコローマンスタイルは行われない。それでも、この競技の世界選手権大会がヨーロッパ以外で開催さ

れること自体、初めてであった。しかも舞台は、もともと徳川宗家の所有地で戦時中に接収され、戦後はGHQ将校の宿舎と将校クラブがあった場所に新設された東京体育館³¹で、本イベントはそのこけら落としでもある。



画像17 リングのマットはまだ四角で現在のような円形ではない。

番組も、「NHKテレビジョン映画」と記され、その下に明確に「製作NHK」と記されている。今でも大相撲以外のNHKのスポーツ中継番組の冒頭で必ず流れる「スポーツショー行進曲」³²がテーマ音楽として用いられている。作曲者の古関裕而（1909-1989）はその後、東京オリンピック開会式で披露された「オリンピック・マーチ」も手掛けることになる。また、この番組は、これまでに視聴した草創期のテレビ番組の中ではスタッフテロップが入った唯一のものでもあった。製作を指揮した大峰淑生こそ日本映画新社所属だが、解説に名のある北出清五郎（1922-2003）はテレビ本放送とともに始まった大相撲中継を始め、様々なスポーツの実況を担当したNHKアナウンサーである。東京オリンピック開会式のテレビ実況では、「世界中の秋晴れを、全部東京に持ってきたような素晴らしい秋日和であります」とその冒頭を飾った。さらに、古関の曲が流れるや「心も浮き立つような古関裕而のオリンピック・マーチが鳴り響きます。」と紹介した。

さらに北出は、本大会開会式で各国選手の入場行進の最後に日本代表が登場する際、「しんがり」は主催国、日本であります。」とコメントした。21世紀では殆ど使われなくなった語彙だが、殿（しんがり）は、もともと軍隊用語で後退、退却する軍隊の最後尾にあって追撃する敵を防ぐ部隊を指し、転じて、隊列や順番の最後尾を意味するようになった。何気ない表現にも時代性が見て取れる。

このように、当時としてはなかなか進歩的で精度の高さが感じられる番組を、レスリング世界選手権で製作できた裏には、本大会を欧州外で初めて東京に持ってきた人脈の存在を無視できない。八田一郎（1906-1983）である。八田はもともと柔道選手だったが、戦前の早大生時代に所属する柔道部がアメリカ遠征で現地のレスリング部に敗北を喫したことから、帰国後、大学にレスリング部を立ち上げた。その後も、「レスリングは柔道の亜流」という大方の日本人の考えには同調せず、再度、単身渡米してレスリング修行を続けた。この時代に培った国際的な人脈が戦後、モノを言うようになり、1946年から日本レスリング協会第3代会長を35年間も務めた。「八田イズム」と呼ばれるようになるその強烈な個性とカリスマ性により、戦後初めて五輪参加が認められた1952年ヘルシンキ・オリンピックでは監督として日本代表を率い、石井庄八選手（1926-1980）がフリースタイル・バンタム級（57kg級）で戦後初の金メダルを日本にもたらした。この実績と勢いを駆り、2年後の世界選手権を初めてアジアに呼ぶことに成功したのである。このように、レスリングが、柔道とは異なる意味でまた、日本のお家芸と呼ばれるようになった背景には、この八田という存在が欠かせない³³⁾。しかも八田は俳人・高浜虚子と自宅が近かったため、虚子に師事し、その俳句人脈から戦後、スポーツ振興にも積極的に取り組まれた三笠宮崇仁親王殿下³⁴⁾（1915-2016）との交流が始まった。レスリングが早くも国体3年目の

1948年から正式競技として採用されたのも、殿下の尽力が大きかったからだといわれる。ご自身の甥であられる当時の明仁皇太子殿下（平成時代の天皇陛下・画像16左）とともにご覧になる試合の会場では、当時の緒方竹虎副総理（1888-1956）やプロレスの力道山（1924-1963）の姿も映像に収められている。



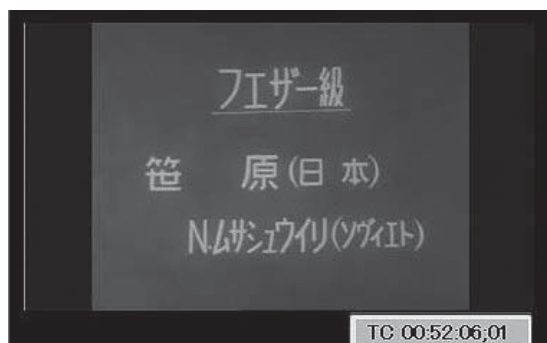
画像16 三笠宮殿下（右）は昭和天皇の末弟

さらに、この大会にはもう一つ、東京オリンピック招致に向けて果たすべき極めて重大なミッションがあった。「(大会二日目の夕方、)各国選手を招いてプリンスホテルで堤衆議院議長³⁵⁾主催の歓迎パーティが開かれました。」NHKが敢えてこのようにホテル名まで明確に出して伝える放送には、珍しさよりも違和感があるが、会場は確かに堤氏自身の所有ホテルである。



画像18 柔道からJUDOへの第一歩

招待された人々に披露されたのは日本の国技・柔道で、堤議長の審判による三船十段対白井八段³⁶⁾の模範試合(画像18)を各国のレスリング選手が観戦し、拍手を送っている場面が1分ほど続いた。招致を目指す東京オリンピックで柔道を正式種目にすべく、国際交流、異文化理解の名を借りた準備がこのような大掛かりに行われている様子を収めた映像は珍しい。



画像19 1954年世界レスリングフリースタイル選手権

肝心の試合では(画像19)、フェザー級(62kg級)で日本の笹原正三選手(1929-) ³⁷⁾が順調に勝ち上がり、最終日の決勝ではソ連のムサシウイリと対戦、断然優勢のまま試合は展開し(画像20)、判定により笹原の優勝が決まった。「笹原、優勝なる！」中央大学の後輩たちが胴上げをして



画像20 笹原(右)は2年後のメルボルン五輪でも金メダルを獲得する

喜ぶ。「会場いっぱい響き渡る君が代、メインポールに日の丸の旗が揚がります。」

今回、スポーツ関連で閲覧した4本の中では、①スピードスケートと③レスリングという日本初開催の世界選手権の番組が地元観衆の声援も熱く、これから大きな世界大会をさらに誘致して運営の経験を積みながら、最終的にはオリンピック招致に結びつけていきたいとする主催者の切なる思いがにじむ。同時に、テレビ放送関係者にとっても手探りの部分を模索しながら、世界トップレベルの強豪が一堂に会する大会の模様をできる限りわかりやすく伝えるキャリアを積み上げていこうという意気込みが伝わってくる。さらに、レスリングの場合は、主催者側にそれ以上のもっと圧倒的、かつ戦略的なまとまり感があり、それが政治的な感触ともつながるように感じられる点が八田一朗の手腕であり、国を挙げてオリンピック招致に臨む現場感でもあろう。一度は戦争で叩きのめされた国家がオリンピックほどの巨大なイベントを呼んでこようと画策するためには、これくらい強権的に物事を推し進めていく野心がどこかに必要なかもしれない。国内統制という点でも、英語をなかなか話せない人の多い国が国際的に他国と伍して権益を獲得しにいく点でも、それをさらに先のビジネスに結び付ける視点とともども、壮大なモチベーションがなければ、とてもそのような国家的目標を目指していけるものではない。

おわりに

30ページの画像は、1954年1月16日に発行された10円切手である。その5日後に男子スピードスケート世界選手権大会が開幕するタイミングで、この記念切手の発行もその直前に急遽決まったため、氷上を選手が滑走するデザインを仕上げるにも、選手と同じかそれ以上のスピードが要求されたという。



1954年発行10円切手

このように、大きな国際大会という、まったく未経験のイベントを招致し、未知の内容に挑戦していくに当たっては、突然、新しい発想が湧いた場合にも、それを可能な限り現実のものとし、実行に移していける企画力と成功させたいとする情熱とが不可欠だ。加えて、それが一部の人の利害に限らず、多くの人の幸福感につながることをメッセージとして発信し、一致団結した協力を得られる形を整えていかなければならない。世界選手権ってなんだ？と思う世間の人たちに切手まで動員しながらアピールしていくのである。

さらに、日本のことを殆ど何も知らない外国の人たちに向けても、である。こちら側にも知らないことが多い。知らないということは理解を得にくいということでもある。このような悪循環を突き崩し、態勢を整えていくためには、むしろ自分たちから率先して相手に働きかけ、コミュニケーションを取れる形に持ち込むことが重要だ。知らないことを知りたい欲求も人間にはある。日本について何も知らない人たちにとって、何よりも実際にその遠い国に足を運ぶ機会があり、その中で全力を尽くす自分の挑戦を重ねながら、さらに新たな経験や発見が得られるとしたら、それは後から思い出すにふさわしい記憶につながるだろう。表彰式でもメダルとともに記念品として日本人形などを授与するシーンが垣間見られた。来日した各国のレスリング選手団への柔道のデモンストラクションも、記録映像として見ると五輪の売り込みと受け取る方が容易だが、選手たちにとっては素直に日本の伝統的な格闘技の紹介であっただ

ろう。まずは日本が知ってもらいたい日本のイメージや文化的価値観を丁寧に伝えていく誠意の中から、次に相手が知りたいと思うものを探っていく。

1953年に始まるテレビ時代にとって、東京オリンピックに至る最初の10年とは、映像という新たな表現手段を手に入れた日本が、これを表現手段として使いこなせるようになるための挑戦を続けながら、海外とやり取りを続け、平和を希求する日本人の切なる願いを国際的なスポーツの祭典というメッセージに落とし込んで具現化し、世界中に発信していく道筋を見つけるまでの自己回帰と再発見の場ではなかったか。近代国家として拡大路線をひた走った結果、得たものすべてを失い、ゼロから復興するしかなかったこの国が生き直していくための屋台骨となるもの、これを表現して送り出していくためには、文化も含めた自分たちのルーツや思いを少しでも多くの人に知ってもらい、日本シンパを増やすことが非常に重要で、テレビはそのための有用な手段になる。1964年東京オリンピックの開会式で、聖火リレーの最終走者が原爆投下当日に広島で生まれた坂井義則さん(1945-2014)だったことに、殊の外、大きな感動を覚えたのが、他でもないあの今はなき国立競技場で彼の走りをともしに見守っていた海外の選手と、その取材で(初)来日した海外メディアだったという事実³⁸⁾が、日本が東京オリンピックに託したかったメッセージに対するもっとも率直な答えだったのではないか。

注

- 1) 正式名称はNHK東京テレビジョン局、コールサインはJOAK-TV。
- 2) 「東京が立候補 六〇年のオリンピック開催地」(「朝日新聞」朝刊6頁 1954年10月10日)
- 3) 「……『……日本の開催ということに関しては、地理的な問題、派遣費用の問題で不可能と思われる。むしろ第18回大会(注：1964年オリンピック)に焦点を合わせ全ての招致活動をすべきであろう』という意見がブランデーIOC会長から伝えられた。」ブランデー会長が1955年に来日した際、東京の招致に向け、多くのア

- ドバイを行ったことが公益財団法人日本オリンピック委員会公式サイト掲載コラム「悲願の東京オリンピック開催へ」にも記されている。https://www.joc.or.jp/past_games/tokyo1964/story/vol02_02.html (最終閲覧日2018年10月29日)
- 4) 脚本・宮藤官九郎 <http://www.nhk.or.jp/dramatopics-blog/2000/266692.html> (最終閲覧日2018年10月29日)
 - 5) ブランデー IOC会長が東洋美術収集家として非常に有名だったことも周知の事実である。
 - 6) 脇田泰子「東京オリンピックの文化発信と海外の受け止めに関する基礎的研究」、2018.3、「相山女学園大学文化情報学部紀要」第17巻、pp. 139-149
 - 7) 村上正樹・飯塚恵理人「愛知県における『テレビドラマ草創期』の基礎的研究～中部日本放送 テレビ演出家・大脇明の仕事～」(「郷土文化」第72巻第1号)
村上正樹・飯塚恵理人「『名古屋芸能文化としてのテレビ局草創期ドラマ制作』の基礎的研究～中部日本放送草創期のテレビドラマ『演出家・伊藤松朗』の仕事～」(「名古屋芸能文化」第26号)
 - 8) 飯塚恵理人・脇田泰子「テレビ草創期のドラマに関する基礎的研究」、2018.3、「相山女学園大学文化情報学部紀要」第17巻、pp. 151-159
 - 9) <https://www.nhk.or.jp/archives/academic/index.html> (最終閲覧日2018年10月29日)
 - 10) <https://www.nhk.or.jp/archives/academic/results/index.html> (最終閲覧日2018年10月29日)
 - 11) 尾上菊之助は本作で共演した藤純子と1972年に結婚した。
 - 12) 「大河ドラマ」は後の名称。本作は大型時代劇としては第4作目。誰もがよく知る物語をテーマに美男子の歌舞伎役者を主演に据えるという前作「太閤記」以後の大河ドラマの安定要素を備えたヒット作。
 - 13) NHK番組アーカイブス学術利用トライアルでは、応募時にNHKアーカイブスのホームページにある「NHKクロニクル」の保存番組データベースを検索しながら閲覧希望番組のリスト(原則30本以内)とともに、視聴場所として、NHK放送博物館(2ブース)、川口・NHKアーカイブス(1ブース)、またはNHK大阪放送局(1ブース)のいずれかの研究閲覧室を指定して事前申請する。採択後は、それらの番組が収録された試写用DVD(音声番組はCD)を、指定した研究閲覧室に必ず出向き、そこに設置されている再生デッキ・モニターを用いて視聴(閲覧)する(筆者らは大阪放送局で申請・視聴した)。
 - 14) オリジナルネガには、映像を収録する「画ネガ」と音声も収録する「音ネガ」があり、音声トラックのみ光学録音されたネガフィルムが音ネガである。画ネガと音ネガをプリンターにセットし、ポジフィルムに画と音を一緒にプリントしていく段階で何らかのずれが生じて修復不可能になったものと思われる。
 - 15) 試写用DVD作成時に保存番組に不具合等がある場合には、このようなコメントが付される。希望番組が万一試写不可能な場合には代替可能な別番組を別途申請できるほか、閲覧開始後の追加希望についても事務局と相談することが可能である。
 - 16) 古田尚輝、「テレビジョン放送における『映画』の変遷」、「成城文藝」、2006、第196号、166-213
 - 17) 日本放送協会編、『20世紀放送史・上』、p.375
 - 18) その当初はニュース原稿を読むアナウンサー自身が画面に映ることもなかった。
 - 19) NHKのテレビ放送が開始された1953年当時から、機動性を重視するニュース取材や番組などのロケで長期間にわたって使用された16mm映画カメラが、ベルハウエル70DR(フィルモ70DR)。スプリング駆動で故障が少なく、電気がないところでも使用できる軽量小型の手持ちカメラとして1980年頃まで使用された[NHK放送博物館が所蔵するものについてウェブ上で情報提供がなされている。<https://www.nhk.or.jp/museum/book/kiki100sen08.html> (最終閲覧日2018年10月20日)]
 - 20) たとえば「緑なき島」(初回放送:1955年11月17日午後07:10～午後07:30総合)は、2015年7月に世界遺産登録された長崎県端島炭鉱の人工島、軍艦島での人々の日常を描いた。石炭採掘の盛んだった当時、人口密度世界一の島には日本初の高層鉄筋コンクリート住宅が建造され、島民は豊かな暮らしを送っていた。
 - 21) 特に有名なのが第8集「日本人と次郎長」。襲名披露や手打ちの儀式など、やくざの実態に映像で迫ったほか、やくざの親分20人ほどが集まって賭博をしているシーンは、事前に警視庁と打ち合わせを行ったほか、一台のカメラで手先のアップや顔の表情、行き交う現金を撮影するためロケは8時間に及んだという。https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010067_00000 (最終閲覧日2018年10月20日)
 - 22) 「太閤記」では過去と現在とが地続きであることを示すため、時代劇なのに冒頭に新幹線が走るシーンを出したため、「放送事故か?」と問い合わせが殺到したという。
 - 23) http://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010022_00000 (最終閲覧日2018年10月20日)
 - 24) 「放送研究と調査」、NHK放送文化研究所、2013年12月号p.15、制作者研究〈“テレビの青春時代”を駆け抜ける第2回NHK吉田直哉〉(最終閲覧日2018年10月20日)
 - 25) 公益財団法人日本スポーツ協会
<https://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid740.html> (最終閲覧日2018年10月20日)
 - 26) 日本では、国体と、60歳以上が中心のスポーツと文化の祭典である全国健康福祉祭(ねりんピック)で炬火リレーを行う。国体では開催地独自に採火され、国体から分かれた障害者のための全国障害者スポーツ大会でも同様である。「聖火」という言葉自体、オリンピックとパラリンピックでしか使用できない。
 - 27) 1994年リレハンメル冬季オリンピックのスピードスケート会場、バイキングスキーベットのアリーナ(通称ハマーホール)に彼の像が立つ。この大会で地元ノルウェーのヨハン・オラフ・コスがやはり1500m、5000m、1万mで世界新記録の3冠を打ち立てた時、ヤルマルの再来と騒がれたことから分かるように、アンデルセンは今なおノルウェーのヒーローであり続けている。
 - 28) この番組については製作スタッフのテロップ表示がないため、アナウンサー名を確認できない。
 - 29) 浅坂選手は八戸商業高校卒業後、一旦就職したのち立教大学に進学し、映像当時は25歳。この年と1955年の世界選手権に日本代表として連続出場し、翌1956年コ

- ルティナダンベツォ・オリンピックに初出場した(500m22位、1500m21位、5000m28位、10000m22位)。
- 30) さらにこの大会で、統一コリアは女子団体が優勝も果たした。
- 31) 東京体育館はこの時以来、国際大会の経験を積み、東京オリンピックでも体操・水球の会場となった(屋内水泳場が完成したのは1958年)。
- 32) プロ野球をはじめNHKスポーツ中継番組の冒頭を飾るメロディである。これ以外にも、古関はプロ野球・阪神タイガースの応援歌「六甲おろし」や夏の全国高等学校野球選手権の大会歌「栄冠は君に輝く」などの名曲で知られる。戦時中は自身の戦争体験もあり戦時歌謡を作ったが、そのような歌に送られて戦地に赴き、亡くなった人々に対する自責の念も強く、戦後は鎮魂の意を込めた「長崎の鐘」や、ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌「とんがり帽子」等、平和を希求する作品を次々に生み出した。このような古関の思いは数々のスポーツに関する楽曲につながり、オリンピック・マーチへと結実していく。
- 33) 当時は四角かったレスリングのマットが現在のように円形になったのも、1971年に国際レスリング連盟が相撲の土俵をイメージした八田の提案を受け入れたからだという説がある。また、1965年自民党から参議院議員選挙に立候補して当選し、いわゆる“スポーツ議員”の第一号ともいわれる。
- 34) 大正天皇と貞明皇后の第四皇男子で、昭和天皇の弟君であった故・三笠宮殿下は、日本オリエント学会の初代会長を務めつつ、たくさんのスポーツの現場に足を運ばれた。ご自身は特にアイススケートに親しまれ、アイスダンスでポーズをとる写真が披露されることもあった。
①の番組で報じた同年スピードスケート世界選手権大会でもレース後の表彰式とパーティで来賓としてくつろぐお姿が映像に残っていた。
- 35) 堤康次郎(1889-1964)氏は西武グループ(旧コクドと旧セゾングループ)の創業者。1953年5月、第44代衆議院議長就任(～1954年12月)。早稲田大学時代は雄弁部と柔道部に入り、1931年(昭和6年)第2回全日本柔道選手権大会(一般成年前期の部)に第5区代表として出場。1934年(昭和9年)第4回全日本柔道選手権大会(一般成年後期の部)に出場し、3位入賞。
- 36) 日本柔道史に残る十段到達者である三船久蔵十段(1883-1965)は、明治・大正・昭和の激動の時代を生き抜き、その生涯の大半を柔道に捧げ、国際柔道連盟の決まり手66技中、今なお、三船しか繰り出すことのできないと言われる幻の技「空気投げ(隅落とし)」を編み出した。また、白井八段は三船門下で一、二を争う弟子の白井清一。
- 37) 山形県山形市出身、中央大学時代にレスリングを始め、先輩である石井庄八の52年ヘルシンキ五輪フリーバントム級優勝を身近で見た。1956年メルボルンオリンピックでは日本選手団旗手を務め、フリースタイル・フェザー級で金メダルを獲得した。寝技で背面から片脚を入れ、相手の上半身をねじるようにして締め上げる「またさき」はSasahara's Leg Scissors(笹原の足ハサミ)と恐れられた。東京オリンピックではフリースタイルのコーチ、1989年から2003年まで日本レスリング協会会長を務め

- たほか、国際レスリング連盟副会長、JOC副会長など国内外のスポーツ界の要職を歴任した。
- 38) 脇田、前掲6)、pp. 146

いづか・えりと/文化情報学部教授
E-mail: erito@sugiyama-u.ac.jp
わきた・やすこ/文化情報学部教授
E-mail: wakita@sugiyama-u.ac.jp